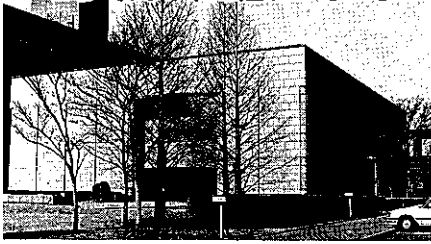


## 地質標本館だより



No.61

### 第7回 自分で作ろう化石レプリカ

地質標本館のイベントの中でも、一般の方々に好評の体験学習「化石レプリカ作り」が11月10日に開かれました。

今回レプリカとして作成したのは「カプトガニ」の化石です。原標本は世界的に有名な化石産地であるドイツのゾルンホーフで採集された中生代ジュラ紀後期(約1億5,000万年前)の標本で、表面は圧迫されているため多少立体感に乏しいのですが、大きさが約17cmもあります(写真2)。この大き

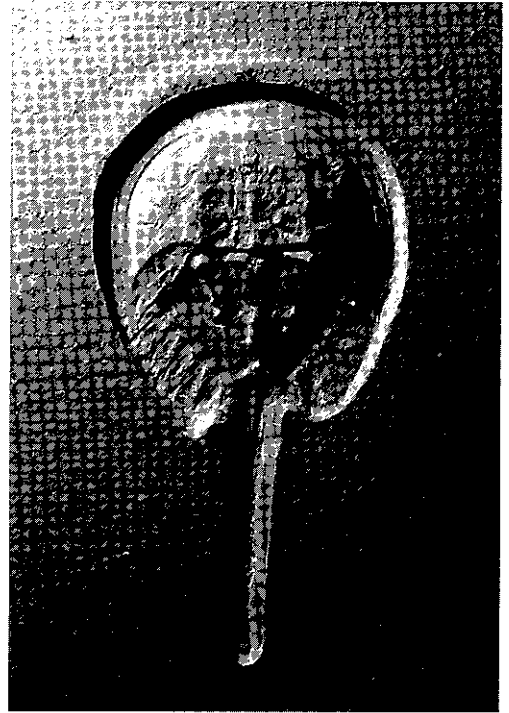


写真2 カプトガニの原標本 (*Mesolimulus walchi* (Desmarest); GSJ F15794)。カプトガニの体長は約17cm。

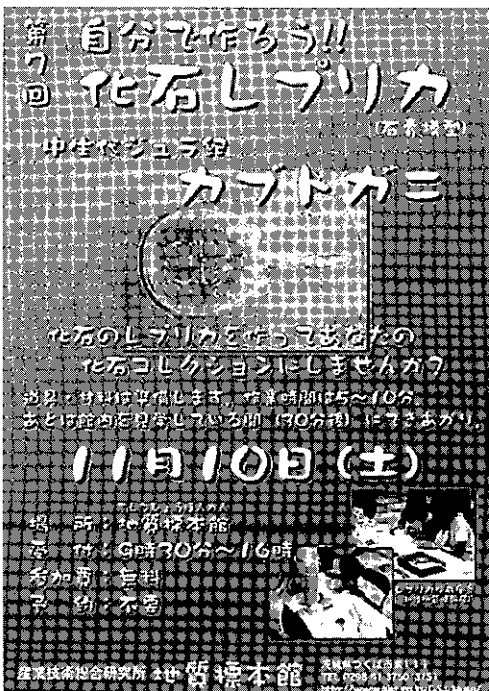


写真1 レプリカ作成宣伝用のポスター、川畑 晶氏作成。

さはこれまでの地質標本館で行った化石レプリカ作りの中でも最大であり、実際に作ってみると迫力があります。

このカプトガニ化石は、現在生きているカプトガニの仲間とほとんど同じ体のつくりをしています。そのため、カプトガニは「生きている化石」と呼ばれています。

レプリカ作成の手順としては、すでに用意されているカプトガニの雌型(原標本からビニールシリコンの印象材で作成)の中に色水で溶かした石膏を流し込み(写真3)、30分ほど石膏が固まるのを待ちます。石膏が固まってから、雌型を取り外すと縦20cm、横12cm、厚さ約1cmの板状の石膏の表面にカプトガニが現れます。作成する上で特に注意することは、石膏を雌型に流し込んだ後、気泡が石膏中に閉じこめられないように雌型表面を専用のヘラなどでなでたり、震動を与えて気泡を追い出す必要があるということです。これが十分にできていないとカプトガニの表面に小さな孔が残ってしまう場合があります。



写真3 印象材で作ったカブトガニの雌型に石膏を流し込む様子。全体に石膏がいきわたるように慎重にやるのがポイントです。

当日はあいにくの雨にもかかわらず、212名の方がレプリカ作りに挑戦してくれました。ほとんどは県内の方でしたが、東京や神奈川などの県外からもわざわざ参加していただきました。年齢層はやはり例年通り小学生が半分以上を占め、親子連れで参加してもらっていることが多いようでした。今回のイベントは広範囲にわたって宣伝をしていたので、参加人数はこれまでのレプリカ作りの中でも過去最高となり、順番待ちをする人たちが標本館はあふれていました。初めて参加される方が全体の4分の3を占めていましたが、何度もレプリカ作りに来ていただく常連の方も多く、イベントを実

施する私たちにとって嬉しい限りです。

レプリカ作りの際に、今度はどのようなレプリカを作ってみたいかという内容のアンケートをとったところ、アンモナイトが一番多く、三葉虫、恐竜などが続くという結果になりました。アンモナイトはこれまでもレプリカ作りに使われていますが、幅広い年代において知名度が高く、最近の人気アニメのキャラクターとしても使われたりして人気が高いようです。多くの方々にレプリカ作りを体験してもらったり、化石に触れてもらうことによって、少しでも興味を持ってもらえると私たち研究者や地質標本館にとってとても喜ばしく感じられます。できるだけ多くの方のリクエストに応え、また常連の方たちにとって新たな化石コレクションとして加えることができる標本のレプリカを作ることができるように考えています。

今回のイベントでは、地質標本研究グループ5名(奥山康子、兼子尚知、坂野靖行、中澤 努、中島礼)、地質標本館5名(利光誠一、熊田みさ子、新津節子、谷田部信郎、春名 誠)に加え、博物館実習生4名(千葉大学:3名、筑波大学:1名)の合計14名がレプリカ作りの指導にあたりました。実習の学生達には、ほかの博物館の実習ではあまり体験できない貴重な体験をしてもらえたのではと思っています。

(中島 礼)